

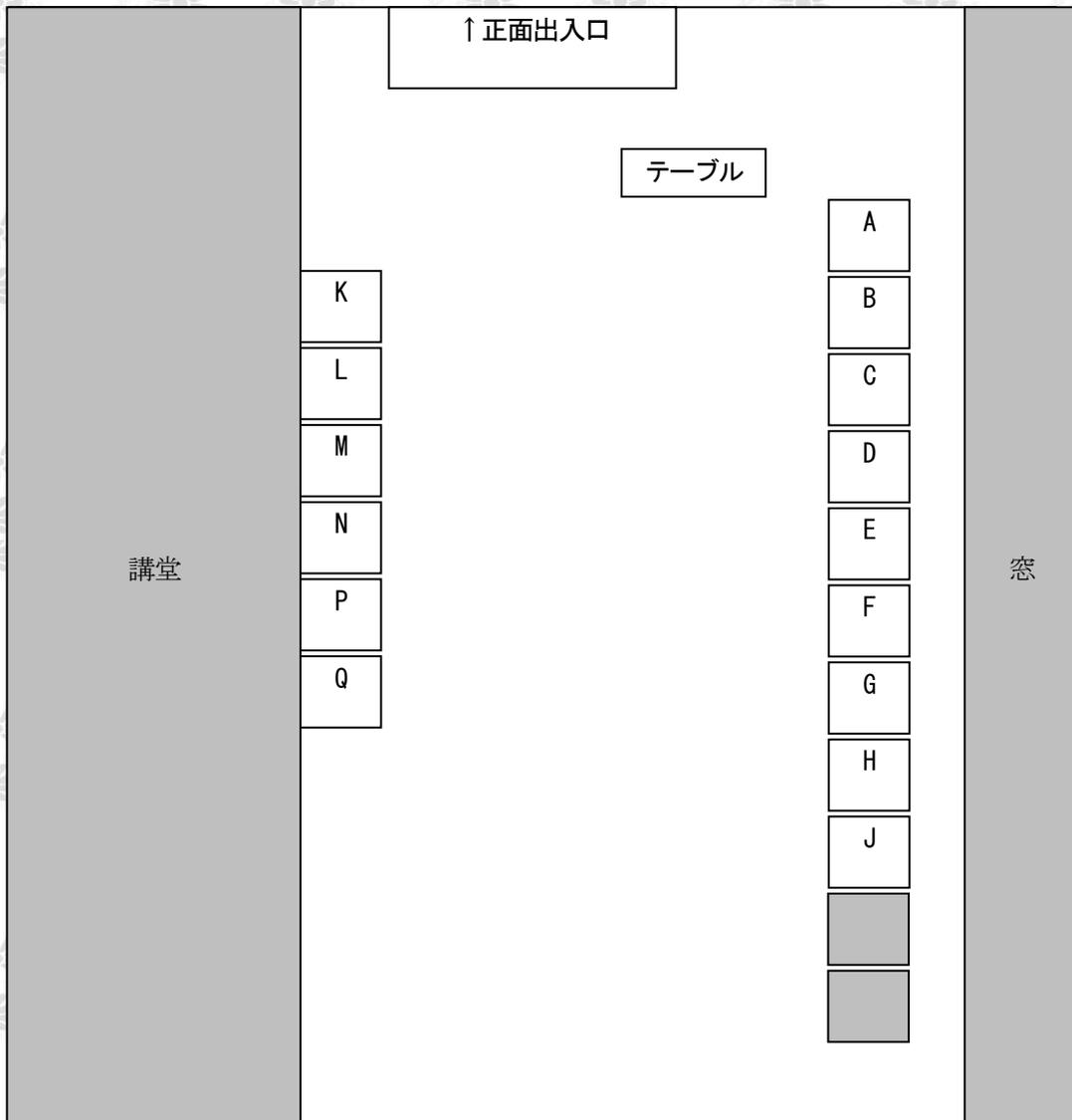
## 「日本・世界の古地図と木版源氏物語絵巻」

今年の資料展示は、シンポジウム「再発見・京のみやこ」で源氏物語や地図が取り上げられることから、最近図書館の蔵書に加わった『木版源氏物語絵巻』と、日本の古地図及び日本以外の国で作られた日本地図・世界地図を選定しました。源氏物語の世界を堪能するもよし、日本と西洋の地図を比較するもよし、それぞれの楽しみ方をご覧ください。

※各展示資料の詳細については、展示ケース横に置いている資料をご参照ください。

シンポジウム「再発見・京のみやこ」の前後にフレデリック・クレインズ准教授による西洋地図の解説も予定しています。

(展示資料配置図)



## 木版源氏物語絵巻

資料 1	ケース A, B, C, D	源氏物語絵巻. — 徳川黎明會 : 東京藝術大學, [昭和年間]
------	-------------------	----------------------------------

## 西洋の日本地図・世界地図

資料 2	ケース E	オルテリウス「日本諸島図」1595年 Abraham Ortelius : Iaponiae Insulae Descriptio. Ludoico Teisera auctore. Antwerpen, 1595.
資料 3	ケース E	ホンディウス「日本」1606年 Jodocus Hondius : Iaponia. Amsterdam, 1606.
資料 4	ケース E	ヤンソニウス「日本新図」1636年 Joannes Janssonius : Iaponiae nova descriptio. Amsterdam, 1636.
資料 5	ケース F	ヤンソニウス「アジア」1641年 Joannes Janssonius : Asia recens summa cura delienata Auct. Henr. Hondio. Amsterdam, 1641.
資料 6	ケース F	ブラウ「日本王国」1655年 Joan Blaeu : Iaponia regnum. Amsterdam, 1655.
資料 7	ケース F	ヤンソニウス「日本・蝦夷地新訂図」1658年 Joannes Janssonius : Nova et accurata Iaponiae, terrae Esonis. Amsterdam, 1658.
資料 8	ケース G	レランド「日本帝国」1715年 Adriaan Reland : Imperium Japonicum. Amsterdam, 1715.
資料 9	ケース G	ケンペル『日本史』所収「日本帝国」1727年 Engelbert Kaempfer : History of Japan. London, 1727. Imperium Japonicum.
資料 10	ケース G	ティリオン「日本帝国精密図」1738年 Isaak Tirion : Carta accurate dell' imperio del Giappone. Amsterdam, 1738.
資料 11	ケース G	ベリン「日本帝国図」1752年 Jacques-Nicolas Bellin : Carte de l'empire du Japon. Paris, 1752.
資料 12	ケース G	シーボルト『日本』所収「日本およびその近隣諸国と従属国」1852年 Philipp Franz von Siebold, <i>Nippon</i> . Leiden, 1852. TAB. I. Japan en deszelfs toegevoegde en cynsbare landen volgens eene oorspronkelyke Japansche kaart.

## 日本の古地図

資料 13	ケース H	重鐫日本輿地全圖 / 長久保赤水 (作). — 星文堂淺野弥兵衛, 天明 3 [1783]
資料 14	ケース H	新刻日本輿地路程全圖 / 長久保赤水 (作). — 須原屋茂兵衛, 弘化 3 [1846]
資料 15	ケース H	喞蘭新譯地球全圖 / 長久保赤水 (作). — 淺野星文堂, 寛政 8 [1796]
資料 16	ケース H	地球萬國山海輿地全圖説 / 長久保赤水 (作). — [出版者不明], 天保 15 [1844]
資料 17	ケース J	日本鹿子 / 礪貝舟也 (作); 石川流宣 (画). — 田方屋伊右衛門, 元禄 11 [1698]
資料 18	ケース J	頭書増補大成節用集 : 二行兩點 / [作者不明]. — [出版者不明], [元禄年間 1688-1704]
資料 19	ケース J	年代記新繪抄 / [作者不明]. — [出版者不明], [宝永年間 1624-1645]
資料 20	ケース J	和漢三才圖會 / 寺島良安 (編). — [出版者不明], [江戸時代]

## 日本の古地図 (壁面パネル)

資料 21	パネル K	城池天府京師地図. — 森幸安, 寛延 3 [1750] (※所蔵者は国立公文書館)
資料 22	パネル L	中古京師内外地圖 : 皇列緒餘撰部. — 森幸安, 寛延 3 [1750], 103×116cm
資料 23	パネル M	皇州緒餘撰部中昔京師地. — 森幸安, 宝暦 3 [1753], 122×77cm
資料 24	パネル N	京大繪圖 : 新撰増補. — 林吉永, 元禄 9 [1696], 166×127cm
資料 25	パネル P	京圖鑑綱目 : 名所手引 / 湖月堂 (画). — 菊屋長兵衛, 宝暦 4 [1754], 90×59cm
資料 26	パネル Q	新增細見京繪圖大全 : 天保改正 / 池田東籬亭 (考正); 中村長秀 (画). — 文叢堂竹原好兵衛, [江戸時代], 73×106cm

## 【木版源氏物語絵巻 資料解説】

### 《木版源氏物語絵巻とは——制作の経緯》

『木版源氏物語絵巻』は、国宝『源氏物語絵巻』（徳川美術館、五島美術館蔵）の普及のために制作された、極めて精巧な版画である。上巻（絵 5 面・詞書 10 面の計 15 面）、中巻（絵 4 面・詞書 9 面の計 13 面）、下巻（絵 6 面・詞書 9 面の計 15 面）、五島美術館本（絵 4 面・詞書 9 面の計 13 面）の、全 4 巻で構成されている。

現存する『源氏物語絵巻』4 巻のうち 3 巻を所蔵していた、徳川家第 19 代当主・徳川義親は、この類い稀な美術品が鑑賞のたびに損傷することを憂慮していた。

そこで彼は、原本の保存のために 2 つの事業を試みた。1 つは、大和絵住吉派直系の絵師であり、古絵巻・古筆の模写で多くの功績があった田中親美たなかしんびに依頼して、完成度の高い模写本を制作すること、もう 1 つは原本を料紙の継ぎ目から剥離し、絵は 1 図 1 面、詞書は 2 紙 1 面を原則として額装に改めることである。

また、この 2 つの事業に加え義親は、『源氏物語絵巻』の普及を図るために、印刷複製を計画した。当時の印刷技術では満足できる試作品が完成しなかったために、義親は親美に諮り、当時の古画木版複製の第一人者であった川面義雄かわづらよしおに制作を依頼した。

こうして、額装に改装された原本をもとに川面が木版複製を制作し、今日『木版源氏物語絵巻』として知られるものができあがったのである。

### 《木版源氏物語絵巻ができるまで》

『木版源氏物語絵巻』は、20 年にわたる長い歳月をかけて制作された。昭和 17 年 (1942)11 月に、財団法人尾張徳川黎明会（現、財団法人徳川黎明会）から委嘱を受けた川面は、まず中巻の複製に着手した。これは昭和 18 年 2 月から開始され、戦時中の困難を乗り越え、6 年後の昭和 24 年に完成している。

しかしその後、徳川黎明会の財政的事情により、事業の継続が困難となったため、上巻・下巻の複製については、国家事業として東京芸術大学で行われることとなった。この 2 巻は昭和 32 年に完成し、さらに五島美術館の許可を得て、徳川黎明会が再び昭和 36 年 10 月から五島美術館本の木版制作の事業を始め、昭和 38 年に全 4 巻の木版本がついに完成した。

## 《木版本の作り方》

実際に木版本が制作された作業工程は、以下のようなものである。

- ①原画から描線、色彩、剥落などを写し取る。
- ②木版の組織、構成を研究し、彫板用の原稿を作る。
- ③原稿を彫る。
- ④手順、方法などの厳密な指導のもと、摺る。

原本の状態を、剥落などの細部に至るまで再現しようとした『木版源氏物語絵巻』は、800回以上もの摺りを重ねたと伝えられている。

川面が最も腐心したのは、原画の品格をいかに写し取るか、という点であった。絵巻が作成された当時、鮮やかに色づけられていたものが古色を帯び、剥落したところから当時の鮮やかな色がのぞいていることで、この絵巻独特のニュアンスが作り上げられているのだが、それを再現するために、鮮やかな色を摺った後で古びた色を重ねて汚していく、という作業が行われた。そういった点にも、川面の信念が現れていると言えるだろう。

1枚の絵に対して版木は約20枚前後、詞書は10枚程度であり、両面彫られている場合も多いため、面の数はその約2倍と考えられる。版木は現在、中巻と五島美術館本は徳川黎明会に、上巻と下巻は東京芸術大学大学美術館に保管されているが、全ての版木が残っているかについては今後の調査を待たなければならない。

## 料紙・書風について

料紙とは、文字や絵を書くのに用いられる紙のことである。

『源氏物語絵巻』の詞書は、小型の料紙を継ぐという独特な形式をとり、巻き広げるにつれ、字色や金銀の装飾が微妙に変化する。染め、撒き、描き、刷りといった料紙装飾のすべての技法が用いられ、同じ 12 世紀につくられたほかの作品とは異なる美意識に貫かれている。

装飾の例として、「蓬生」の第 4 紙では雲母刷りの波文様が見られ、「柏木(一)」の第 2 紙では銀砂子の雲形を地面に見立て、墨や茶色の顔料で柳を描いている。また、「柏木(二)」の第 8 紙には梅花文様を散らしている。

『源氏物語絵巻』の書風は、5 つに分類されている。

例えば「柏木」の詞書は、上代和様の流れをくむ最も流麗優美な書風として知られるが、「蓬生」の詞書はまた別の書風で、ところどころ側筆(筆を傾け腹の部分を使う筆法)を交え、太い線で力強く書いている。

このように、絵だけではなくそれぞれの詞書においても様々な趣向が凝らされている『木版源氏物語絵巻』だが、なかでも目を惹くのが「御法」の詞書である。紫上の逝去という、物語中でも重要な場面を描くにあたり、計 5 枚の料紙にすべて異なる装飾が施されており、制作者の力の入れ具合が窺える。

特に、第 1 紙の蝶・海松・巴の文様の繊細さは見事で、2 匹の蝶のうち片方には翅の筋までが描きこまれている。

書風は、優美繊細な上代和様を受け継ぐもので、端正な字形、たっぷりとした筆遣い、優しく穏やかな連綿体など見どころが多い。特に第 4 紙は、その典雅な書きぶりを示している。

一方第 5 紙は、濃い墨で書かれた行に薄い墨の行を重ねている。圧縮した書体によって、物語の悲劇的な要素と不安感とを表しており、絵画的な迫力を有している。

## 蓬生

画面の人物は、右から、末摘花の侍女、馬の鞭を持って先導する惟光、袈折傘の下が光源氏。

帝の赦しを得て帰京した源氏だが、故常陸宮の姫君、末摘花のことを思い出す折はあるものの、便りをするでもなく時間が過ぎてゆく。

翌年の四月、忍び歩きの道すがら、見覚えのある木立に源氏は車を止めさせる。蓬が生い茂り築地は崩れ、見る影もなく荒れ果てた末摘花の邸であった。姫君はひっそりと源氏の訪れを待ち続けていた。露払いの惟光を先導に、源氏は藪の原を進んでゆく。朽ちた簀子縁、老女房の姿、末摘花の暮らしぶりが思いやられる。

## 横笛

夕霧は、亡き柏木の正妻落葉宮に心惹かれている。柏木の一周忌も過ぎた、ある秋の夜、夕霧は落葉宮を訪い、柏木遺愛の笛を贈られる。夜更けて家に戻った夕霧は、月を愛でつつ笛を吹く。すると、その夜、夕霧の夢に柏木が現われ、笛を伝えたい人物がいると告げる。おりから赤子がひどくむずかかって泣き始める。雲居雁は乳を含ませながら夕霧に「遅くまで夜歩きしたり、夜更けの月見などなさるから、物の怪が入ってくるのですわ」と恨み言をいうのであった。

画面には左に夕霧、胸を広げて乳を含ませる雲居雁、向かい合っている乳母。間に魔除けの散米(うちまき)がある。燭台を画中に描くことで夜を思わせている。

## 柏木 (二)

柏木は、女三宮の出家を聞いて、いっそう病重く、回復の見込みもない。帝も心を痛め、にわかには権大納言に昇進させた。夕霧は、友を見舞い力づけようとするが、柏木はもはやこれまでと、源氏の勘気のとりにしを頼み、正妻落葉宮の後事を託すのであった。

床に臥せる柏木を包み込むかのように描かれた夕霧の姿態は、友への優しき思いを象徴する。悲しみにくれる女房たちの装束や室内調度の文様と彩りが、柏木の悲劇性を強調する画面は、華麗でありながらも、憂愁に満ちている。

## 柏木 (三)

朱塗りの丸(まる)高(たか)坏(つき)、華やかに着飾った女房たち、今日は、薫の五十日(いか)の祝いである。にこにこ無心に笑っている薫をいだけ源氏の胸中に、さまざまな思いがよぎる。源氏は薫に柏木の面差しを見いだし、世間に明かすことのできない形見を残して、この世を去ってしまった柏木を不憫とも思うのであった。

画面は急勾配の長押(なげし)によって二分され、左手の室内部分に源氏や女房たちが、窮屈に配置されている。この凝縮された描写の密度が、源氏の複雑な思いを伝えるのである。

## 鈴虫（二）

十五夜、冷泉院からの急な招待に源氏は若い公達を引きつれ参上する。

物語では、「若き人々」は車中で笛を吹き、「月やゝさしあがり」とあるのも院参の途中の描写だが、絵では邸でも楽器を演奏し、右隅に大きく月を描いている。時間的に隔たりのある二つの情景を、絵では一つの場面にまとめていると思われる。

画面は平行線を主体とした明快な構図をとり、冷泉院と対面する源氏を中心に公達を配している。笛を吹く人物は物語では「若き人々」とあるだけだが夕霧とする見方もある。

## 御法

二条院の一室、風吹き荒ぶ秋の夕暮。数年来健康を損なっている紫上は小康を得て、萩、桔梗、薄(すすき)などの秋草の靡く前(せん)栽(ざい)を見ようと脇息(きょうそく)に凭れ、折から見舞いに来ていた明石中宮と語らっていたところへ源氏が訪ねて来る。

脇息に身を凭せ涙を拭うのが紫上、烏帽子直衣姿で俯いているのが源氏、その間にか細い後ろ姿を見せているのが明石中宮である。

倒れんばかりに靡く萩、桔梗、薄は、この画面に一層の不安感と胸に迫る悲劇的な雰囲気とを醸し出させることに成功している。

## [ケース E] 16～17 世紀前半の西洋古版日本地図

ポルトガル人がアジアに進出し、16 世紀の半ば頃に日本に到着してから、日本についての情報は旅行記などの形で西洋に伝達された。これらの情報を元に、西洋においていくつかの日本地図が作製されていたが、地理的情報の欠如により、これらの地図は粗雑なものであり、多くの場合、日本は一つの円形として表現されていた。

西洋において作製された初めての本格的な日本地図は、1595 年にオルテリウスの地図帳に所収されたポルトガルの地図制作者ルイ・テイセイラのものであった（資料 2）。この地図は日本に渡航したポルトガル人の情報に加えて、当時の日本製の地図をも参照して作成されたと思われる。この地図は 17 世紀前半における日本地図の原型となり、多くの模写が作成された（資料 3 および資料 4）。また、世界地図にも同じ図形が用いられていた（展示ケース F、資料 5）。

### 【資料解説】

---

## 2. オルテリウス「日本諸島図」1595 年

Abraham Ortelius : Iaponiae Insulae Descriptio. Ludoico Teisera auctore. Antwerpen, 1595.

本図は西洋において初めて地理的情報を元にして製作された日本地図である。現在確認できるそれ以前に西洋で製作された日本地図は想像上のものである。アントワープの地図製作者オルテリウスがポルトガル人地図製作者テイセイラから入手した素図を元に 1595 年にアントワープで出版した。テイセイラはその情報を日本に渡航したポルトガル人の記録や日本から持ち帰った行基式日本図などのような日本製の地図から得たと考えられている。テイセイラの地図は半世紀の間日本地図の原型となり、当時多くの模写が作成された。なお、「北海道」は描かれておらず、「韓国」は島として認識されている。

## 3. ホンディウス「日本」1606 年

Jodocus Hondius : Iaponia. Amsterdam, 1606.

ホンディウスはオルテリウスと同様にフランドルの地図製作者であり、スペインに対するオランダの独立戦争の時にアムステルダムへ移住し、そこで地図出版の工房を営んだ。この地図出版の一環として、ホンディウスはメルカトルの『地図帳』の銅版を遺族から入手して、1606 年に再版している。メルカトルの『地図帳』には独立した「日本図」がなく、それを補充するため、ホンディウスはテイセイラの日本地図（資料 2）を修正せず挿入した。なお、真ん中に描かれている船は 1598 年～1601 年に世界一周を成し遂げたファン・ノールトがフィリピン沖で出会った日本船を描いたスケッチを模写したものである。

## 4. ヤンソニウス「日本新図」1636年

Joannes Janssonius : Iaponiae nova descriptio. Amsterdam, 1636

ヤンソニウスはホンディウスの娘と結婚し、ホンディウスの死後、ホンディウスの息子ヘンリクスと共に地図印刷工房を継承していき、メルカトルの『地図帳』の出版も継続していた。1636年に「日本新図」と題する地図を出版しているが、船図などの装飾以外に修正は見られない。

\*\*\*\*\*

## [ケースF] 17世紀後半の西洋古版日本地図

17世紀半ば以降、アジアからもたらされた新しい情報を元に西洋で作成された日本地図は少しずつ変遷していき、いくつかのパターンが出来上がった。オランダの地図製作者ヤンソニウスの日本地図（資料7）はテイセイラの地図に東インド会社の素図における地理情報が盛り込まれている。また、オランダ東インド会社の公認地図製作者であったブラウの日本地図（資料6）には東インド会社の素図の他に中国に滞在していたイエズス会士マルティーニから得た情報も加えられている。

### 【資料解説】

---

## 5. ヤンソニウス「アジア」1641年

Joannes Janssonius : Asia recens summa cura delienata Auct. Henr. Hondio. Amsterdam, 1641.

このアジアの地図は資料4の「日本新図」と同様にヤンソニウスとホンディウスによる共同作である。この地図に描かれている「日本」は「日本新図」と同じような形をしている。「北海道」は依然として描かれていないが、それ以前に島として描かれていた「韓国」は半島として描かれている。

## 6. ブラウ「日本王国」1655年

Joan Blaeu : Iaponia regnum. Amsterdam, 1655.

この日本地図はブラウが1655年に出版した『中国地図帳』に所収されていた。ブラウの『中国地図帳』はイタリア人のマルティーニが持ち帰った地理情報に基づいている。マルティーニは1642年～1651年の間イエズス会士として中国に滞在していたが、ヨーロッパへの帰路の途中オランダ人に捕らえられ、アムステルダムに送られた。そこで、オランダ東インド会社の公認地図製作者であったブラウに中国および日本に関する地理情報を伝えた。ブラウはその他に東インド会社所蔵の素図も利用して、特に東北地方の太平洋側の情報を新たに付け加えている。地図の右上に「蝦夷」の一部分も描かれている。

## 7. ヤンソニウス「日本・蝦夷地新訂図」1658年

Joannes Janssonius : Nova et accurata Iaponiae, terrae Esonis. Amsterdam, 1658.

ヤンソニウスはブラウと同様にオランダ東インド会社の素図を入手し、それまで出版していた日本地図にこれらの素図の情報を付け加えた。この新情報は1639年に東インド会社職員クワストとタスマンによって測量されていた房総半島や伊豆諸島、1643年に同じく東インド会社職員デフリースによって測量された東北地方や蝦夷（北海道および千島諸島）の地理情報から成っている。しかし、デフリースの測量は部分的にしか行われていなかったため、北海道や千島諸島の描き方が不正確である。

\*\*\*\*\*

## [ケース G] 18 世紀の西洋古版日本地図

18世紀になると、オランダ東インド会社の職員が持ち帰った日本製の地図が西洋における日本地図製作の直接的な模範となる。ユトレヒトで出版されたレランドの日本地図（資料番号8）は石川流宣の「日本海山潮陸図」を、地名の漢字表記を含めて、忠実に転写している。また、1690年～1692年に日本に滞在していた医師で博物学者でもあるケンペルも複数の日本製の地図を持ち帰り、それらの地図の情報を元に新しい日本地図が『日本史』（1727年刊、資料9）に掲載され、ティリオン（資料10）やベリン（資料11）などによって模写された。

ケンペル『日本史』所収の日本地図の原型は19世紀まで用いられていたが、シーボルト『日本』（資料12）の出版以降、ようやく日本地図は現代の地図に近い形となった。

【資料解説】

## 8. レランド「日本帝国」1715年

Adriaan Reland : Imperium Japonicum. Amsterdam, 1715.

レランドはオランダのユトレヒト大学の教授であった。本地図は西洋で作製されたそれまでの日本地図と違って、（右下にある長崎湾の描写を除いて）、西洋側の情報ではなく、日本製の地図のみに依拠している。その日本製の地図とは、石川流宣の「日本海山潮陸図」であり、地図の下にある文章によると、レランドはその地図をオランダ東インド会社の理事から入手した。なお、左下に描かれている日本人の絵は、長崎オランダ商館長日記を出版したモンターヌスの『東インド会社遣日使節』（1669年刊）から転写されている。

## 9. ケンペル『日本史』所収「日本帝国」1727年

Engelbert Kaempfer : History of Japan. London, 1727. Imperium Japonicum.

1690年～1692年に日本に滞在していた医師で博物学者でもあるケンペルは複数の日本製の地図を持ち帰り、死後にケンペルの原稿を元に『日本史』を編纂・英訳したショイツァーはそれらの地図の情報を元に新しい日本地図を『日本史』に掲載した。日本製の地図に基づいているとはいえ、本地図の正確さは17世紀に出版されていたヤンソニウスやブラウの地図に明らかに劣る。それにもかかわらず、その後の100年の間において、西洋において日本地図の原型となった。

## 10. ティリオン「日本帝国精密図」1738年

Isaak Tirion : Carta accurate dell' imperio del Giappone. Amsterdam, 1738.

ケンペル『日本史』の日本地図の海賊版が広く流布していた。アムステルダム出版社イザーク・ティリオンはケンペルの日本地図を模写し、1728年に出版した。本地図はイタリアにおいてティリオンの日本地図を模写したものである。

## 11. ベリン「日本帝国図」1752年

Jacques-Nicolas Bellin : Carte de l'empire du Japon. Paris, 1752.

フランスの地図製作者ジャック・ニコラ・ベリンはティリオンと同様にケンペルの日本地図を模写したが、若干の修正を加えた。また、イエズス会の著作を手掛かりにいくつかの地名を追加したようである。初版は1736年で、以降1800年頃まで西洋において最も利用された日本地図となった。

## 12. シーボルト『日本』所収「日本およびその近隣諸国と従属国」1852年

Philipp Franz von Siebold, *Nippon*. Leiden, 1852. TAB. I. Japan en deszelfs toegevoegde en cynsbare landen volgens eene oorspronkelyke Japansche kaart.

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは1823年～1829年に日本に滞在した時に多くの地図を収集した。これらの日本製の地図は幕府天文方高橋景保から入手し、伊能忠敬や間宮林蔵の測量に基づく、優れた観測方法によるものであり、シーボルトが西洋の測量に適合させるための修正を加え、1852年にライデンで出版した。シーボルトの日本地図の出版以降、西洋における日本地図製作は科学的領域に入り、現代の日本地図に近い形となった。

## [ケースH] 17～18 世紀日本人が描いた地図①

### ながくぼ せきすい ～長久保赤水が描いた地図～

世界地図や、経緯線が入った地図は新鮮であったのだろう。長久保赤水の描いた経緯線が入った日本の地図は多く流布した。彼の描く世界地図も興味深い。江戸時代においても、測量や作図に関する西洋の知識が日本に伝わってきた。これらを日本人が実用的に活用していたわけではないが、その幾何学的な面白さは日本人の美意識を刺激した。初めて日本図に経緯線を入れたのは、浮世絵師である石川流宣と言われている。

## 【資料解説】

### じゅうせんにほんよちぜんず 13. 重鐫日本輿地全圖

長久保赤水(作), 星文堂浅野弥兵衛, 天明 3 [1783]

緯線には北緯が数値として入っているのがわかるが、経線には数値が入っていない。緯度は春分秋分の太陽の南天位置で知ることが出来るが、経度は持ち運び可能かつ正確な時計を使って時差を知ることが出来ないと計測できないためである。当時はそのような時計が無かった。

### しんこくにほんよちろていぜんず 14. 新刻日本輿地路程全圖

長久保赤水(作), 須原屋茂兵衛, 弘化 3 [1846]

緯度の原点は赤道である。経度の原点は現在はグリニッジであるが、1884 年の国際子午線会議でグリニッジ子午線が決定されるまでは、おおよその国はその国の首都を子午線の原点としていた。森幸安、伊能忠敬ははっきりと京都を原点としている。長久保の地図ではあまりはっきりしないが、京都を通る子午線を描いている。

### おらんだしんやくちきゅうぜんず 15. 啁蘭新譯地球全圖

長久保赤水(作), 浅野星文堂, 寛政 8 [1796]

大西洋上と太平洋上の境界線で二つの半球に分離した世界地図。このような半球図は他にもあり、赤道で南半球と北半球に分離したものもある。周囲にある説明には地球は球形をしていることが書かれている。

## 16. 地球萬國山海輿地全圖説

長久保赤水(作), [出版者不明], 天保 15 [1844]

世界図を見ると、大陸の形状は一つの着目点である。オーストリア大陸、南極大陸がどのようになっているか。また北極がどのように描かれているか。大陸探検の成果と地図の大陸の描かれ方は連動している。

\*\*\*\*\*

## [ケースJ] 17～18 世紀の日本人が描いた地図② ～和装本にみる地図～

現代「地図」と言われて思い浮かべるイメージははっきりしている。しかし、時代をさかのぼるにつれ、「地図」と、書物や絵画の境界線は曖昧になってくる。現代で言えば、いわば旅行書、歴史書にあたるような地誌、年代記のなかに現れる解説のための絵や図は、それだけが独立して絵図や地図になっていく。いわば「地図」の源流の一つであると考えられる。

### 【資料解説】

## 17. 日本鹿子 (14 巻序目 1 巻)

磯貝舟也(作) ; 石川流宣(画), 田方屋伊右衛門, 元禄 11 [1698]

鹿子とは、斑点を絞り出した、着物の鹿子紋のことである。この時代の地誌には京羽二重、江戸鹿子と、着物にちなんだ名前がつけられることがある。藤田理兵衛は『江戸鹿子』(1687 年) 序文にて仮名草子・東海道名所記を引用し「武蔵野に茂り茂めや江戸鹿子と古き人発句したまふ」と自身の著作を『江戸鹿子』と命名したと説明する。『日本鹿子』は、磯貝舟也が、五畿七道の城下・旧跡・社寺・名物などを総覧・略記したもので、この『江戸鹿子』にならった命名である。

## 18. 頭書増補大成節用集 : 二行兩點

[作者不明], [出版者不明], 元禄年間[1688-1704]

節用集とは室町中期に成立した国語辞書。編者未詳。語をいろは順に分け分類・配列したもの。江戸時代にはこれを改変増補した多種多様のものが刊行された。本節用集はいろは順の本文に先立ち図表類が集められ、家紋や風俗図、かけ算の九九の表などがおさめられている。その中の世界地図『世界萬國総圖』である。資料 15,16 の世界地図と比較してみると面白い。

## 19. ねんだいきしんえしやう年代記新繪抄

[作者不明], [出版者不明], [宝永年間 1624-1645]

年号や歴代天皇、神社仏閣の建立の時期などを年代順に整理したもの。そのほかに、風俗図、花押の図表類もおさめられている。京都、日本の絵図とともにおさめられた世界地図。

## 20. わかんさんさいずえ和漢三才圖會

寺島良安(編), [出版者不明], [江戸時代]

寺島良安により三十年余をかけて編纂され、正徳二年(1712 年)から享保の間にかけて刊行された図入りの百科事典。中国の『三才図会』にならい、和漢古今の万物を天・地・人の三才に分け、絵図を付し漢文で解説した。展示は、巻第六十四『地理』の冊である。日本の各地誌、解説の他、朝鮮、耽羅、琉球、天竺などがおさめられている。

\*\*\*\*\*

### [壁面パネル] 17~18 世紀の日本人が描いた地図③

## もり こうあん森幸安と京絵図

彼は長久保赤水や伊能忠敬といった名前に比べれば無名な存在であるが、同時代の多くの知識人と交流があり、当時の日本の知の体系を「地図」という形で体現した人物である。伝統的な地誌の流儀を堅く保ちつつも、西洋から伝わる測量や作図の知識に興味を抱いた。地域の時代的変遷を描いたり、京都、日本、アジア、世界を連続的な空間として捉えるなど、ある種の "科学的" な視点で地図をとらえている。

本展示では京都の絵図を比較してみた。同時代の他の絵図と比べて異なる点が見いだせる。彼は自身の描いたものを「繪圖」とはよばずに「地圖」とよんでいた。

## 【資料解説】

---

### 21. 城池天府京師地圖

[壁面パネルK]

森幸安, 寛延 3 [1750] (※所蔵者は国立公文書館)

森幸安の代表作。手書きである。刊本の京大絵図に比べ、情報量が多い。時代的には 1600 年ごろの情報も混在しており、ある一つの時代を描いている訳ではないようだ。しかし、発掘結果と一致する部分もいくつか見られ、森幸安の考証の確度が伺われる。

### 22. 中古京師内外地圖：皇列緒餘撰部

[壁面パネルL]

森幸安, 寛延 3 [1750], 103x116cm

### 23. 皇州緒餘撰部中昔京師地

[壁面パネルM]

森幸安, 宝暦 3 [1753], 122x77cm

森幸安は江戸以前の時代の地図を自身の考証によって作っており、「中古（昔）」と名付けている。一つの地域を異なる時代でかき分けるといのは、森幸安の一つのポリシーである。しかし、ある一つの時代を描いているわけではなく、『天府京師地圖』に比べれば、曖昧な点も多くなっている。

### 24. 京大繪圖：新撰増補

[壁面パネルN]

林吉永, 元禄 9 [1696], 166x127cm

江戸時代に木版画で摺られた絵図のひとつである。墨摺に彩色されている。林吉永は御絵図所とも自称し、当時絵図の出版では名だたる版元であった。

### 25. 京圖鑑綱目：名所手引

[壁面パネルP]

湖月堂(書)；菊屋長兵衛, 宝暦 4 [1754], 90x59cm

木版摺の京絵図は江戸時代を通して様々なものが刊行されている。時代が変われば当然街も変わる。このような街の変化に、版元は、版木の一部を切りとり入れ替えることによって対応した。そのような版木の切れ目を探してみるのも面白い。

### 26. 新增細見京繪圖大全：天保改正

[壁面パネルQ]

池田東籬亭(考正)；中村長秀(画), 文叢堂竹原好兵衛, [江戸時代], 73x106cm

木版摺、手彩色。文叢堂竹原好兵衛は林吉永とともに、京絵図を多く刊行している版元である。